

平成 28・29 年度盛岡市埋蔵文化財調査報告書

山 蔭 焼 窯 跡

— 市営上水道管敷設工事等に伴う緊急発掘調査 —

2019. 3

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 28 年度に盛岡市上水道整備とガス管敷設工事に伴う埋蔵文化財の立会調査。及び平成 29 年度に高齢者福祉施設建設のため実施した埋蔵文化財試掘調査の報告書である。平成 28 年度の第 1 次調査は中野館遺跡として発掘届が提出されているが、近世末期陶磁器窯の確認により、山蔭焼窯跡として報告するものである。
- 2 本書は遺構、遺物の実測図などの資料提示を意図して作成し、編集執筆は室野秀文が担当し、菊地幸裕、津嶋知弘、神原雄一郎、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、鈴木俊輝、今松佑太、上柿南が協力した。
- 3 遺跡の平面位置は世界測地系による緯度、経度で表示した。
- 4 高さは標高値をそのまま用いた。
- 5 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使い分けている。土層註記は層位ごとに記した。なお、層相の観察にあたっては、(小山正忠、竹原秀雄編 1970『新版 標準土土色帖』農林水産省水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所監修)によっている。
- 6 使用した地形図は盛岡市都市計画図(縮尺 2500 分の 1)を縮尺調整して使用している。
- 7 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。
- 8 本調査成果の一部については、市民向けの公民館講座や発掘調査成果報告会等で公開しているが、内容が異なる部分については、本書をもって訂正する。
- 9 調査の体制は次のとおりである。

事業の指導・助言 文化庁記念物課 岩手県教育委員会生涯学習文化課

調査主体

盛岡市教育委員会 教育長 千葉 仁一 教育部長 豊岡 勝敏

教育次長 中野 玲子(～ H28) 大倉 真澄(H29～)

歴史文化課

課長兼遺跡の学び館長 杉本 浩(H28～)

遺跡の学び館(発掘調査)

館長補佐 北田 牧子(～ H28) 多田 秀明(H29～)

文化財副主幹 室野 秀文 菊地 幸裕

文化財主査 神原雄一郎(～ H29:調査担当) 今野 公顕 花井 正香(調査担当) 佐々木亮二

文化財主事 鈴木 俊輝(調査担当)

文化財調査員 今松 佑太(調査担当) 上柿 南(H30～)

発掘調査及び報告書作成(五十音順敬称略)

及川 京子 川村久美子 佐々木あゆみ 佐藤美智子 佐野 光代 細田 幸美

袴田 英治

調査協力

太田 稔(地権者) 川股 裕

目 次

例 言	
目 次	1
I 調査経過	1
II 調査成果	2
(1) 遺 構	2
(2) 出土遺物	6
III 調査の総括	8

I 調査経過

(1) 遺跡の位置と過去の調査

盛岡市茶畑一丁目にある松尾神社は松尾大明神とも呼ばれ、江戸時代以来、酒造業者や商人などに広く信仰されてきた。神社の立地する丘陵は、戦国時代末期の中野館跡と伝えられている。この城館は盛岡城跡本丸から南東に1.1 kmの位置にあり、盛岡八幡宮のある八幡山が、高さを低めつつ南西に突出した場所にある。昭和40年代ごろから市街化が進んで地形が大きく変貌し、現在では住宅地、駐車場、市道などの土地利用がなされている。中野館の南東部には、江戸時代末期の天保6年から7年(1835～1836)山蔭焼という陶磁器生産の窯場が置かれた場所である。この辺りでは以前から近世末期の陶器、磁器の破片や窯道具が採集されており、近世末期の窯業遺跡として注意されていた。

中野館遺跡については1979年4月と1991年11月、2001年3月と3度の試掘調査が実施されている。このうち1991年の第2次調査は個人住宅改築に伴うもので、住宅基礎工事立会調査の結果、中世城館の堀1条が確認されたため、住宅基礎の掘削が及ぶ範囲に限定し遺構確認調査を行った。堀は現在の道路や周辺地形とは異なる方向に伸びており、堀の幅や深さなどは不明である。堀の埋土上部からは近世末期の陶磁器類の破片が多く出土した。また、第1次調査、第3次調査では遺構、遺物共に未確認であった。地元の話では、元々鏡餅のように段を重ねた高い地形が存在したが、戦後の開発で大きく削り下げて広い平坦地になった場所だという。第1次、第3次調査の場所はこの削平部分にあたるらしい。この北側から北西側の急斜面や南側の斜面、松尾神社の高台などに僅かに名残が見られるが、他は大きく変貌している。昭和23年(1948)にアメリカ軍によって撮影された写真(国土地理院HP:第1図版)では開発される前の地形が判明し、これをもとに地形復元を試みたのが第2図である。これを見ると東西80 m、南北35 m～40 mの楕円形の本曲輪(本丸)があり、北西側が急崖、北東から東側、南東側には二段に広い腰曲輪が造成され、南側にはやや広い二ノ曲輪らしい場所がある。この西側が松尾神社であり出曲輪のような場所であったらしい。北東側八幡宮境内の八幡山とは地形がくびれており、堀が類推される。後述する1号窯は本曲輪南東側の腰曲輪二段について地ならしを行い、傾斜をつけて構築されたもので、戦後の開発では登り窯の傾斜が市道に利用されたらしい。

(2) 調査の経過

平成 28 年 (2016) 7 月 12 日, 盛岡市上下水道事業管理者から, 中野館遺跡内の市道に上水道の配水管とガス管の敷設施工するための発掘通知が提出された。この場所は中世城館跡と近世窯跡であるため, 工事は遺構確認を行いながら進めることになった。同年 8 月 18 日に予定地内の既設管確認のための試掘を行った結果, 各所で山蔭焼らしい陶磁器破片や窯道具が確認され, 遺物が分布する範囲の工事区域全てを立会調査することになった。その結果同年 8 月 27 日までに, 現在の市道の地下に延長 33 m 余りにわたる登り窯の存在を確認した。窯の内部から多量の染付磁器や陶器, 窯道具や窯壁の破片が出土した。窯は西へ登る坂道に沿って構築されており, この道路は 1 号登窯跡の傾斜を活用して構築されたものと判明した。一方この年, 第 1 次調査の地点から南に 30 m ~ 40 m の台地下の平坦部について, 土地所有者から老人介護施設を建設したい旨の事前協議があった。現地には陶磁器破片や窯道具などの散布が見られたので, 対象範囲について発掘届提出の上, 遺構遺物確認のための試掘調査を実施することになった。翌平成 29 年 (2017) 6 月 8 日, 土地所有者であり事業主から発掘届が提出された。岩手県教育委員会に進達し, 埋蔵文化財試掘調査を実施するよう指示があった。

試掘調査は平成 29 年 7 月 12 日 ~ 14 日まで実施した。計画地に 4 箇所のトレンチを設定し遺構確認を行ったところ, A トレンチでは台地の麓から急傾斜で落ち込む遺構を確認し, 黒色土中から中国明時代の青磁碗底部が出土した。調査担当者は城館の堀跡と考えている。また B, D トレンチでも遺物が認められたほか, 斜面部の C トレンチでは焼土, 素焼き状態の磁器細片多数が混入する土層を確認し, ここを 2 号窯跡とした。

II 調査成果

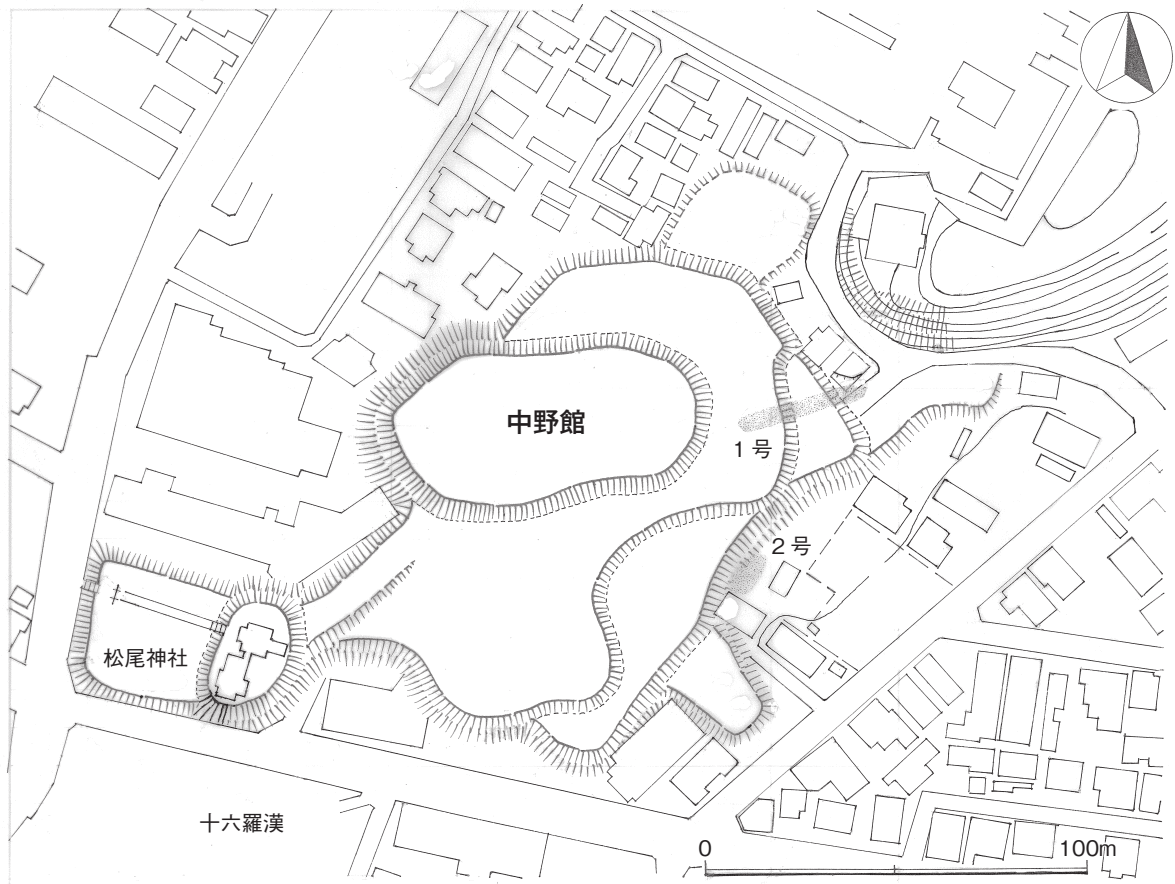
(1) 遺 構

1 号窯跡 (第 3 図, 第 5 図)

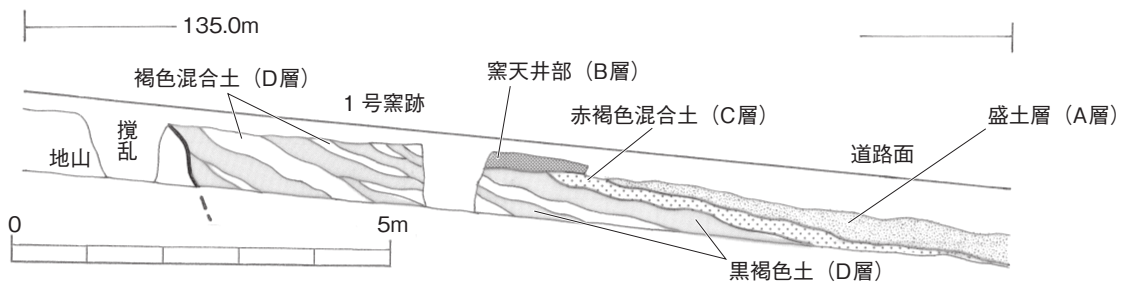
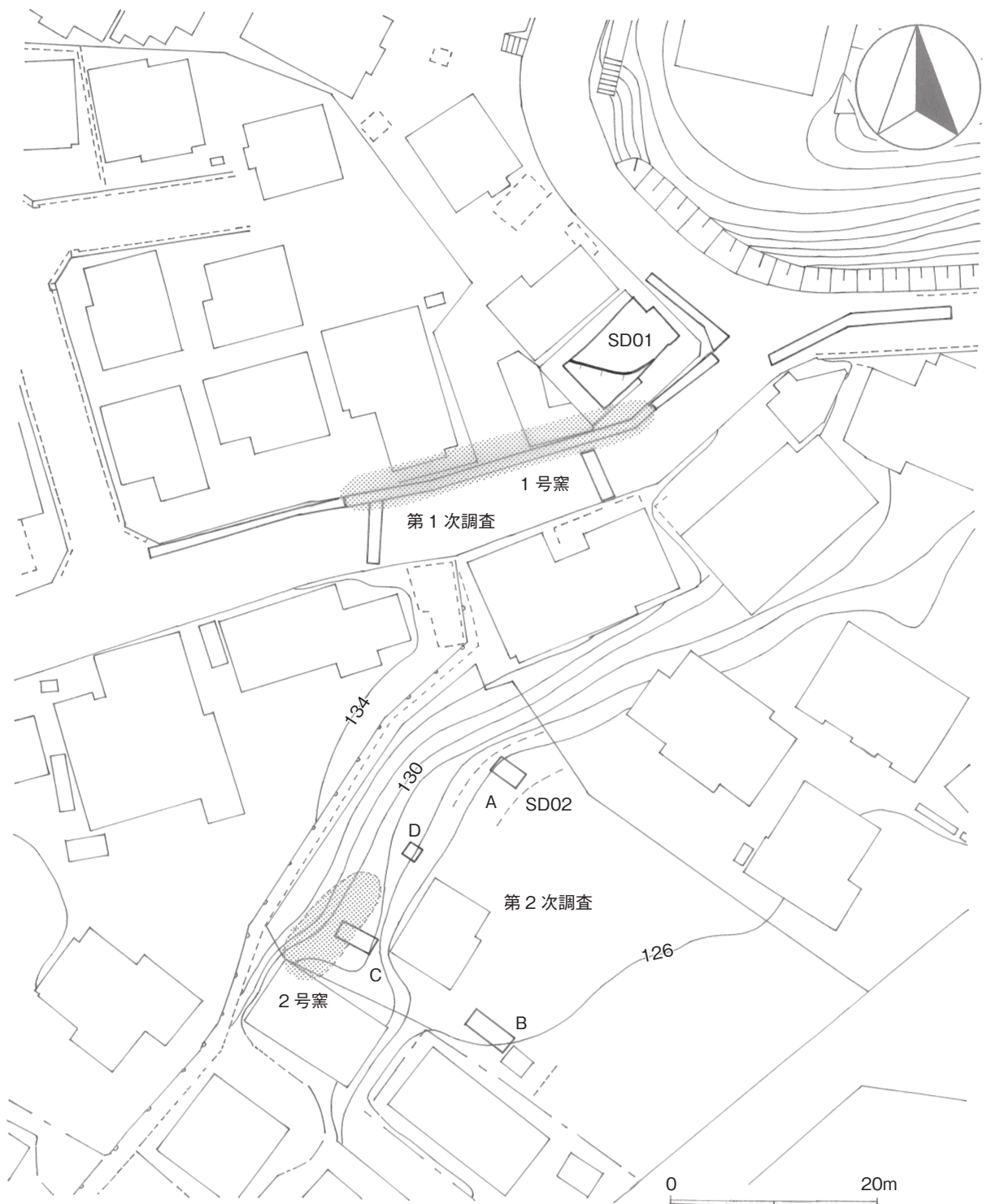
第 1 次調査で市道下に存在が確認された窯跡である。現在の市道路面は東から西へ 4° 前後の傾斜で登り坂となっている。既設管等の攪乱部分も深く入った部分も多いが, 残存の良いところでは地表から 25 cm ないし 30 cm で窯跡の埋土上面に到達している。地形と遺構確認状況から, 窯の総延長は 32 m から 33 m, 真北からの主軸方位は N 108° W を示す。窯の幅員ははっきりしない。窯の西端部は窯尻の立ち上がりも確認され, 確認部分で 78 cm の高さがある。窯の底は工事の掘削が及ばないため未確認で, 窯の構造や詳細については, 実際の遺構では確認出来ていない。窯の東端部は明瞭な掘り込みなどは確認出来ていないが, 焼土の分布と, 崩落した窯壁の集中箇所などから, 中野館第 2 次調査の S D 01 堀の南側と推定される。窯の西端で確認される地山は黄灰褐色のシルト質壤土。窯の西端部の内部には, 黒褐色土層と, 黄灰褐色土と暗褐色土の混合土が互層となって堆積しており, 埋土上面には赤褐色にレンガ化した窯の天井部の破片 (B 層) がある。各土層は東へいくにつれて深くなり, しだいに黄灰褐色や褐色土の混合土による盛り土が厚く堆積している。この堆積状況から A 層は窯を廃棄した後の盛り土層, B 層は窯の天井部分の破片。C 層は崩落土または盛り土。D 層は黒褐色土と褐色土が互層となり, 窯跡内部に堆積した土層と考えられる。このことから登り窯の傾斜度は, 路面の 4° よりも幾分急勾配で構築されている可能性があり, 特に窯の焚き口付近は地下深くに埋没し残存しているものと予測される。遺物は窯跡内の堆積土から染付磁器



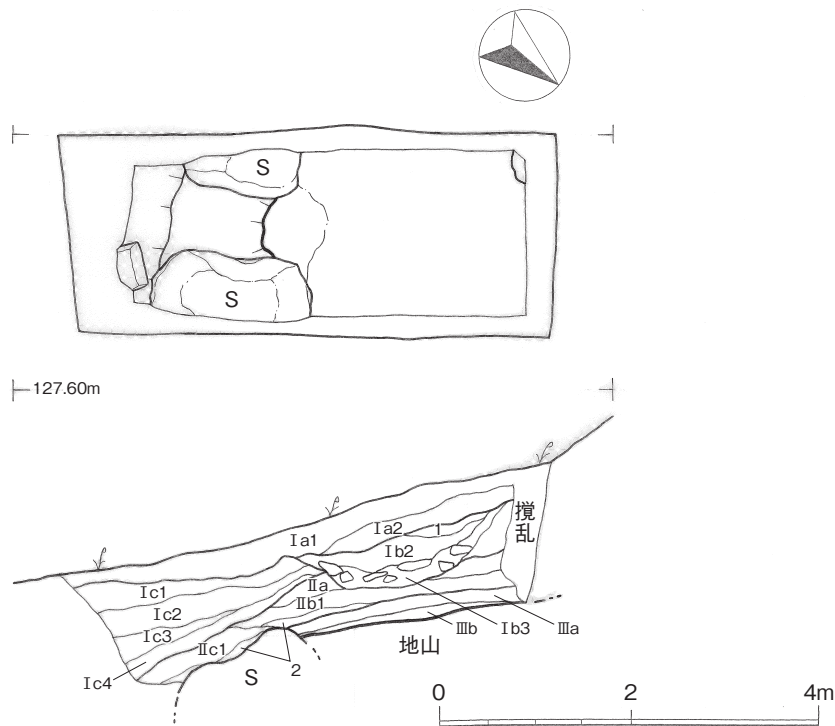
第1図 遺跡の位置



第2図 中野館跡地形復元図



第3図 山蔭焼窯跡位置図及び断面図



第4図 Cトレンチ (2号窯跡)

の破片、素焼破片、陶器破片、窯道具の焼き台、トチン、タコハマ、ハマ、窯壁などが多く出土している。焼台やトチンにはハマや染付磁器碗の破片が融着していることから、磁器生産の窯であることは確実である。陶器も焼成したか否かは明確ではない。窯壁には白色の釉薬が厚く掛かった破片や、連房式登窯のロストル（狭間）の部材らしい直方体の破片もある（写真10）。遺物の詳細は後述する。

2号窯跡（第3図、第4図）

第2次調査のCトレンチで確認された窯である。窯の規模構造は不明であるも、トレンチの西壁に焼土層が2面あり、II層～III層内から夥しい素焼の小破片が包含されていることにより、トレンチの北側から西側に窯の存在が確実視される。トレンチで確認された土層はI a層からI i層までは暗褐色土主体で明治期以後の陶磁器類が出土する。II a層からII c層は焼土、もしくは焼土粒の多く含まれる暗褐色土層であり、窯壁や窯道具、陶磁器破片が出土する。III a層からIII b層は焼土主体の混合土であり、素焼きの小破片や微細な粒が無数に混入している。

出土遺物はトレンチ内のII層～III層から磁器の素焼の小破片多数と染付磁器の皿、碗などの破片が出土したほか、表土から中世の瓷器系挿鉢口縁部破片が出土している。

SD02 堀（第3図）

第2次調査Aトレンチで確認された。台地裾の黄灰褐色シルトの地山が急勾配で落ち込み、この内部に黒色土が堆積していた。南側のBトレンチではこのような低みは確認されず、台地の裾を廻る堀の一部である可能性が高い。黒色土の上部から中国明時代の青磁稜花皿底部が出土している。

(2) 出土遺物

陶磁器

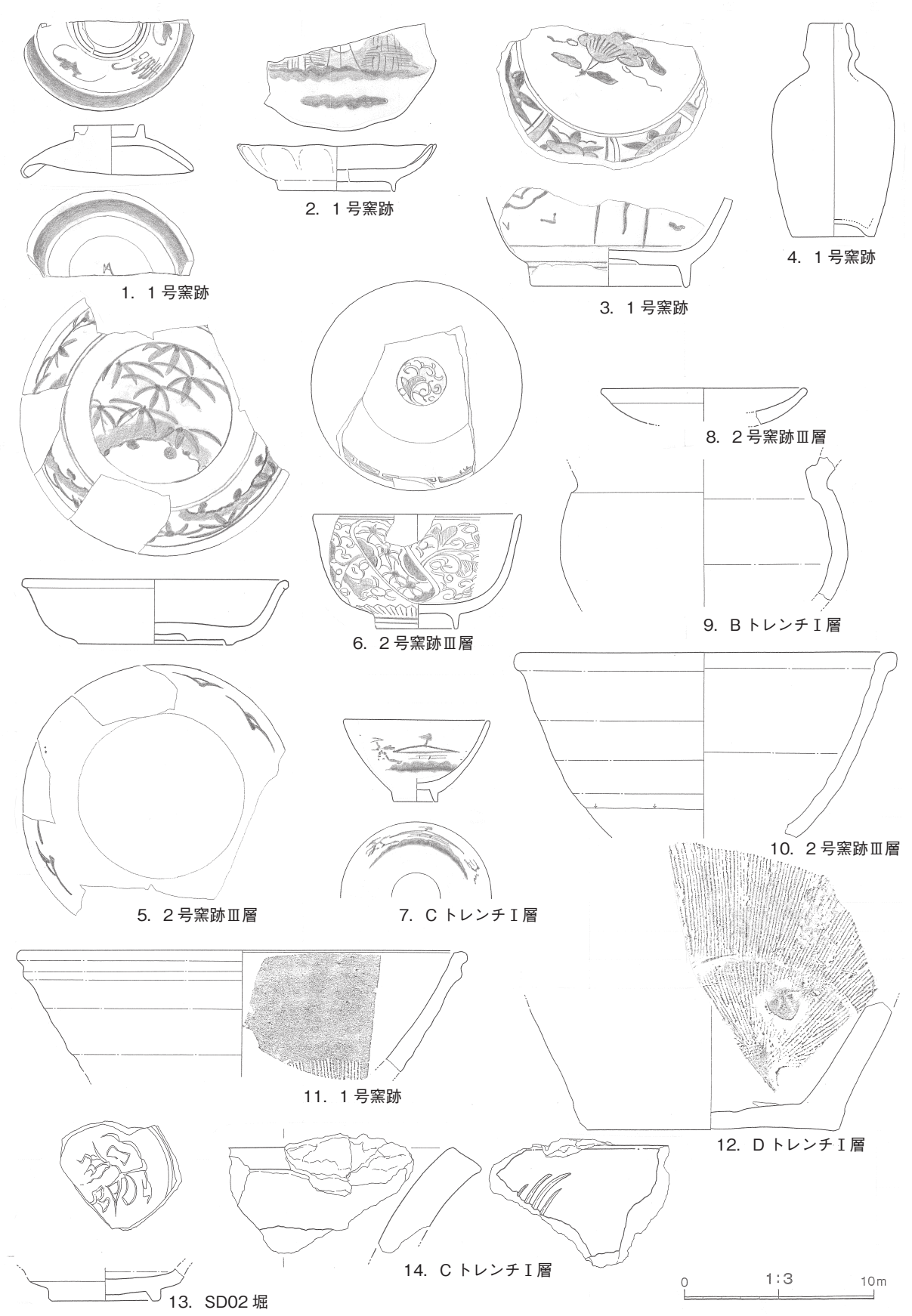
第1次調査では総数79点の陶磁器破片が出土し、このうち78点が1号窯跡から出土した陶磁器破片である。このうち71点は染付の磁器類、残りは陶器類の破片である。磁器類には本焼き前の素焼段階の破片も出土している。また第2次調査では総数310点の陶磁器破片が出土し、このうちCトレンチのⅢ層からは196点が出土している。Cトレンチ、Bトレンチから多くの陶磁器や窯道具の出土があるが、Aトレンチからは近世陶磁器は出土していない。Dトレンチから白磁播鉢の破片1点が出土している。出土した染付磁器の器種は、皿、小皿、碗蓋、碗、湯飲碗、猪口、徳利、瓶子、土瓶、鉢、井、植木鉢、火入れ、火鉢などのほか、白磁の播鉢も生産されている。焼成時に歪んだものや、灰を被ったものなどがあるほか、染付の表面に微粒の気泡のようなざらつきが認められるものがある。磁器の胎土は灰白色ないし浅い黄橙色に焼かれているが、胎土内に黒色の小さな粒が認められるものもある。

第5図1は碗蓋で上面に壽字と蝙蝠文が交互に配されている。2は輪花の手塩皿で、内面の底部に楼閣山水文と雪文がある。3は高台付の鉢で、内部見込みと外周の区画帯に牡丹文がある。外面にも区画帯があるが、文様は不明。4は窯跡東端部の窯壁の間から出土した白磁徳利であるが釉調は薄い鼠色に近い、口縁部直下には横位の凸帯がある。底部が饅頭形の上げ底になっている。第5図5はCトレンチから出土した染付丸皿である。口唇部の玉縁は折り返した痕跡が確認できる。底部は蛇目凹形高台である。内面には雪の輪と笹文、外面には飛翔する海鳥らしい文様がある。6はCトレンチから出土した高台付湯飲み碗である。内面見込みには丸い圏線の中に唐草文、口縁部には雷文帯、外面は楕円文と唐草文、底部近くには剣先の連続文である。7は染付の高台付猪口で、表面には細かい気泡状のザラつきが浮き出ている。外面は雪の上に楼閣山水文、内面は無地である。8はCトレンチより出土した江戸時代後期のカワラケである。赤褐色に焼成され、体部下半を再調整しており、盛岡城跡の腰曲輪のⅢe～Ⅲf層に類例がある。9は外面を荒く削り黒色処理した小形甕である。10は内外に藁灰釉をたっぷりとした掛けた陶器の鉢である。花巻の鍛冶町焼に類例がある。11は1号窯から出土した白磁播鉢口縁部、12はDトレンチから出土した白磁播鉢の底部である。

13はS D 02 堀の埋土上部から出土した中国青磁稜花皿の底部である。内面見込みには刻画文がある。15世紀後半～16世紀前半の製品である。14はCトレンチ表土から出土した瓷器系播鉢の口縁部である。厚手の鉢で口唇部には粘土塊が付着し、形状は歪んでいる。13世紀代の製品である(註1)。

窯道具

図示していないが第1次調査、第2次調査ともに数多くの窯道具類が出土している。棒状で両端部に焼き台を作るトチンには長さ30cmを越える大形のものから長さ20cmに満たない小形のものがある。大形のトチンは表面が盛岡城の赤瓦のように暗赤褐色の釉が薄く掛けられたものが多く認められる。小形のトチンには無釉のものがある。大形のトチンには磁器の碗破片が融着したものが認められる(写真20)。四方突出形のタコハマは破片が多い。丸いハマが融着した破片もある。ハマには径3cm程度の小さなものから、径20cmをこえるものもある。円錐状のものや、太鼓状のもの、小形で中央のくぼんだ形状のものもある。



第5図 出土遺物

Ⅲ 調査の総括

山蔭焼の窯は江戸時代末期の天保6年（1835）の10月に工人を招き築窯、翌年12月29日まで操業した藩営の陶磁器窯であり、陶磁器の職人は肥前有田から招聘して生産した。藩の財政事情から極めて短期間の操業であったが、後に弘化三年（1846）城下北東の新庄花古に再び登り窯が開かれ、藩営で磁器生産が再開されている。今回は市営の上水道管敷設に伴う立会調査であったが、これまで詳細な地点が不明であった山蔭焼の窯本体を確認できた。長さは東西33mに及び、出土した窯壁や狭間の部材から見て連房式登窯の可能性が高い。盛岡市中央公民館に所蔵される山蔭焼窯場の図2枚の内1枚（写し）によれば、窯は11房からなる連房式登窯である。この窯の南側には別の小さな窯が描かれており、これが第2次調査で確認された2号窯と考えられる。第2次調査Cトレンチで確認された素焼きの破片が多数包含される焼土層の存在から、この小形の窯は本焼き前の素焼き窯であったらしい。

山蔭焼の製品がどこまで流通したものなのかはまだ明らかではないが、盛岡城跡では江戸時代末期の土層や遺構の中から、同一の特徴をもつ製品が出土している。すくなくとも盛岡城下には相当数出回っていると考えられるが、これらの考古学的検証はこれからであり、盛岡領内の近世遺跡の出土遺物についても、山蔭焼の製品が含まれていないかどうかは、今後検証されなくてはならない。また、この後に操業した花古窯跡の製品との比較検討も必要である。花古窯跡の出土陶磁器は、現地で大量に採集されており、江戸時代末期の肥前国有田の製品にも近い優品も多い。花古窯跡の出土遺物の整理が待たれるところである。

最後に、第2次調査で出土した瓷器系挿鉢の1点について触れておきたい。この破片がどのような経緯でこの窯跡に存在したのかは明らかではないが、戦国期の中野館に鎌倉時代の挿鉢が伝世したものかもしれない。ただ、形状の歪みや粘土塊の付着を考えれば、付近に中世窯の存在も予想される。これについては将来の調査課題としてあげておきたい。

註1 この挿鉢の破片については、平泉町役場の八重樫忠郎氏に写真と実測図を送り、鑑定していただいた。

引用参考文献

神原雄一郎 2017年 「盛岡のやきもの物語」平成29年度盛岡市中央公民館講座資料

千田和文、神原雄一郎、佐々木亮二 2010 『もりおかで焼かれたやきもの

— セトモノから煉瓦まで —』盛岡市遺跡の学び館第9回企画展図録

吉田 義昭 1957年 「盛岡藩鼻子焼」『奥羽史談 第21号』奥羽史談会

吉田 義昭 1983年 『図説盛岡四百年上巻』郷土文化研究会



写真1 山蔭焼窯跡付近空中写真（1948年米軍撮影：国土地理院HPより）



写真2 1号窯跡付近



写真3 1号窯跡立会調査状況



写真4 1号窯跡西端部土層断面



写真5 1号窯跡土層断面



写真6 第2次調査区遠景



写真7 第2次調査区調査前



写真8 試掘調査状況



写真9 Aトレンチ (SD02)



写真10 2号窯跡 (Cトレンチ)



写真11 2号窯跡土層断面



写真12 2号窯跡土層断面



写真13 Bトレンチ

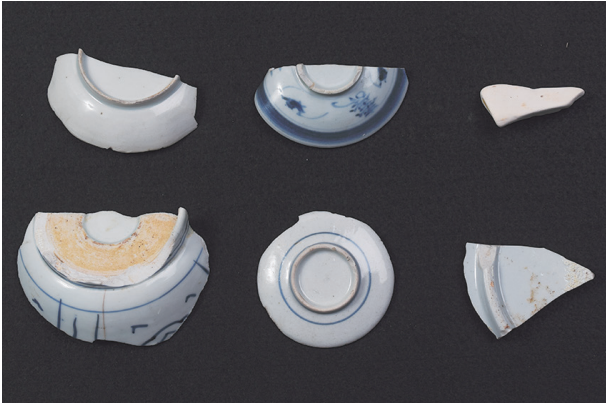


写真 14 1号窯跡陶磁器 (外)



写真 15 1号窯跡陶磁器 (内)



写真 16 1号窯跡陶磁器 (外)



写真 17 1号窯跡陶磁器 (内)



写真 18 1号窯跡陶磁器



写真 19 1号窯跡 窯壁



写真 20 1号窯跡窯道具



写真 21 1号窯跡窯道具

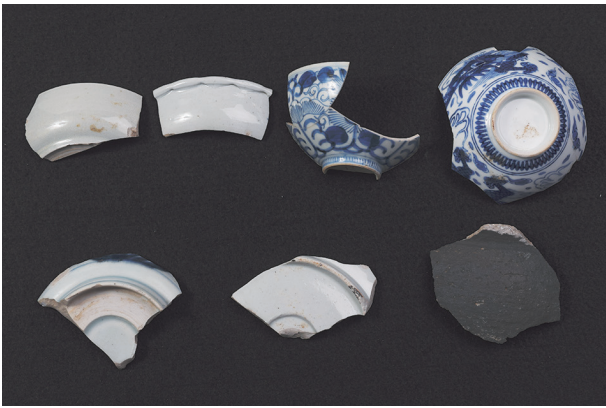


写真 22 第 2 次調査 B トレンチ陶磁器



写真 23 第 2 次調査 B トレンチ陶磁器



写真 24 第 2 次調査 C トレンチ陶磁器



写真 25 第 2 次調査 C トレンチ陶磁器



写真 26 窯跡表面採集陶磁器 (外)



写真 27 窯跡表面採集陶磁器 (内)

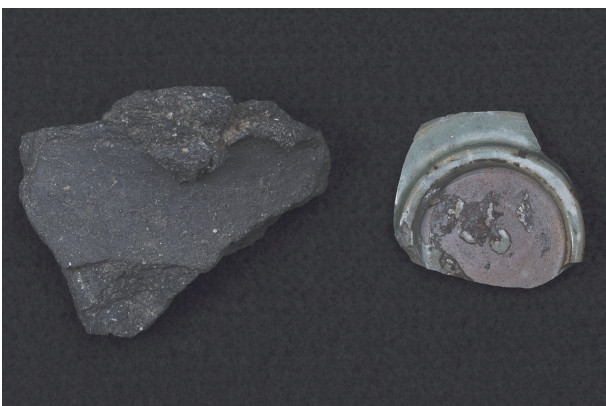


写真 28 瓷器系擂鉢・青磁稜花皿



写真 29 瓷器系擂鉢・青磁稜花皿

ふりがな	やまかげやきかまあと
書名	山蔭焼窯跡 — 市営上水道敷設工事等に伴う緊急発掘調査 —
副書名	平成 28・29 年度盛岡市埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	室野秀文, 神原雄一郎, 花井正香, 鈴木俊輝, 今松佑太
編集機関	盛岡市遺跡の学び館
所在地	〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 TEL 019-635-6600
発行機関	盛岡市教育委員会
発行年月日	2019 年 3 月 26 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかのたてあと 中野館跡 やまかげやきかまあと 山蔭焼窯跡	いわてけん もりおかし 岩手県盛岡市 ちやばたけいっちようめちない 茶畑一丁目地内 および ちやばたけいっちようめ ばん 茶畑一丁目 2 番 12	03201	LE17-1026	39° 41' 38.96"	141° 9' 46.89"	1次 2016. 8. 18 ～ 8. 27 2次 2017. 7. 12 ～ 7. 14	1 次 101 m ² 2 次 28 m ²	上水道敷設 工事 高齢者福祉 施設建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野館跡	城館	中世後期	堀 1	青磁稜花皿	中野館の堀
山蔭焼窯跡	陶磁器 窯跡	江戸時代末期	陶磁器登窯 1 磁器素焼窯 1	中世播鉢, 近世末期染付皿, 碗蓋, 碗, 猪口, 湯飲, 火入 れ, 植木鉢, 角皿, 土瓶, 播鉢, 徳利, 瓶子他	天保 6 年 (1835) から翌年 12 月に かけて稼働した, 盛岡藩御用窯の跡
要約	中世城館の堀と陶磁器。近世末期の藩営陶磁器生産の窯跡を確認した。				

平成 28・29 年度盛岡市埋蔵文化財調査報告書

「山蔭焼窯跡 — 市営上水道敷設工事等に伴う緊急発掘調査 —」

平成 31 年 3 月 26 日
盛岡市教育委員会

編集 〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
盛岡市遺跡の学び館

印刷 〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 2 丁目 8 - 7
河北印刷株式会社

